

1. 時代背景

1.1 この本の正式表題と時代背景

『われらの時代の学問方法について』: ジャンバッティスタ・ヴィーコ 1708/10/18 講演

この時代は、デカルトの論理的思考法が、強力な影響を及ぼしており、ヴィーコはデカルト主義者を意識し講演している。また、ペイコンの『学問の進歩』が1605年に刊行されており、これもこの講演に大きく影響している。

1.2 デカルトの思考方法(17世紀半ばに発表)

デカルトは、もっとも単純かつ確実な要素から始めてそれを演繹していけば最も複雑なものに達するという、還元主義的・数学的な考えを規範にして、以下の四規則を定めた。

1. 明証的に真であると認めたもの以外は、決して受け入れないこと。(明証)
2. 考える問題をできるだけ小さい部分にわけること。(分析)
3. 最も単純なものから始めて複雑なものに達すること。(総合)
4. 何も見落とさなかったか、全てを見直すこと。(枚举)

絶対正しいと言う確信を得るために、幼児から無批判に受け入れてきた先入観を排除し、真理にいたるために、少しでも疑わしいもの排除して徹底的に全てを疑う。まず、感覚は誤ることがあるから排除する。さらに、単純計算 ($2+3=5$) も後で間違っていると気づくことがあることから、排除する。等々

こうして、肉体を含む全てを懐疑していくと、最後には疑っている精神だけが残る。デカルトは、「このようにすべては偽であると考えている間、その私自身はなにもかでなければならぬ。」と考え、これだけは真であるといえることを発見する。有名な「我思う、ゆえに我あり=Cogito ergo sum(ラテン語)コギト・エルゴ・スム」である。

そして「我思う、ゆえに我あり」という命題が明らかに真になったので、そこから展開して、「自己の精神に明晰かつ判明に認知されるところのものは真である」とする。

その他、座標系を用いた解析幾何学等を使って、確実な推論をデカルト主義者は進めた。

2. 講演の概要

ヴィーコは、個別の学問知識成果において当時は古代に対して優位に立つが、

『人間に知られるべく容認されていることは、人間自体と同じく有限で不完全である。』
と言う立場に立って、

『われわれの時代と、ギリシャ・ローマの古代と比較すると、知識の利得と損失は同量である。

古代人が知らないことがわれわれには頭わで、一方古代人が軽蔑した分野に注力したが、われわれが全く知らないことが、古代人に知られていた。古代人はわれわれが省みない分野に打ち込んでいたのである。』

学問の方法を見直そうと企てる。文章で表現されてはいないが“学問の方法”で進歩がない限り、人間の得る“知識の総量は変わらない”と言うことである。従って、学問の方法の見直しが重要になる。彼の“問題提起”は、以下のとおりである。

『学問方法においてわれわれのものと古代人のもの、いずれがより正しくより良いのであろうか?』

このため、彼は両方の利点と不都合について例を挙げて比較し、(1709年当時の)現状の不都合を明確化し、不都合に関して、回避可能なものには手段を論じ、回避不可能なもので古代人の

不都合と相殺しているものを明確にして、古代人より全体として優位になるようにする。

ヴィーコは、学問方法を一般に以下の3つから成り立つとした。

1. 道具・・・学問の順序を含む

クリティカ(=以下論理的思考)、解析、機械学(力学)、化学と薬学、顕微鏡、望遠鏡等

2. 補助手段

賢慮(深慮よりはじめて見える見識で技芸で導かれない。プロネーシス=実践知の意味)
の技法集、模範となる傑作、印刷、大学等

3. 目的

真理の追求

本書全般の内容は表1のとおりである。

クリティカと呼ばれるデカルト思考法の欠点は下図1のとおりである。特に、クリティカで思考する場合は、豊富な真実らしいものを、落としてしまうと言うことを一番の欠点としている。また、想像力や類推能力が殺されるのも、クリティカの欠点である。

ヴィーコは、賢慮(=実践知)を重視している。

完全に真実	クリティカ	知者	真実らしい物を落とす。反応が遅い。
真実らしいもの 時々真実なもの	賢慮	賢者	現実に根ざし真理を探す
	経験知	狡猾な者	現実に反応するが真理を探さない
完全に虚偽		愚者	何でもつかむ

真実らしいものが豊富であるが、これを論理的思考では落としてしまう。

真らしいもののなかには、大部分真実だが例外的な事項で虚偽になるものを含む。

図1 デカルト的論理的思考の欠点

また、ヴィーコのもう一つの主張は、統一性である。個別の学問の専門家が、自分の分野以外にも口を出すことを、彼は嫌っている。しかし、ばらばらに無節操な、部分知識の付与も同じく否定している。

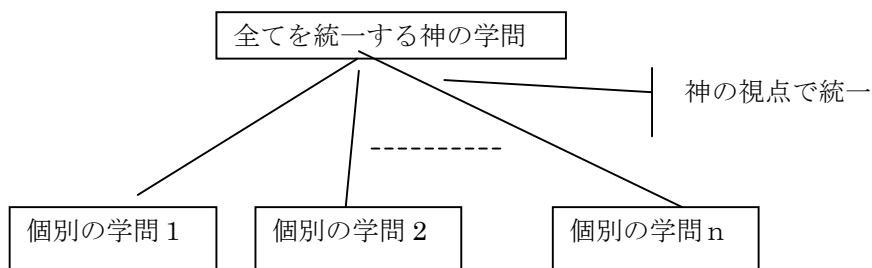


図2 ヴィーコの理想とした学問(統一精神の存在)

表1 学問の方法 概要

大	小項目	17世紀の利点と欠点	古代の利点	解決策
道 具	論理的思考 (クリティ カ)	利点：第1原理からの確実な推論が出来る 欠点：常識(共通感覚)や真らしいものの排除、トピカ軽視 弁論における遅い応答(考えさせてください) 实用知(賢慮)の軽視	幾何学の直観重視の論理、トピカとトボスの重視 雄弁を重視している。真理は一つ、真らしいこと は多く、虚偽は無限と知っていた	若い時に話題を豊富にし、共通感覚を増大させ、 想像力や記憶力を鍛えその後で、論理的思考を学 ぶ。聴講生から発言を許される学生への制度(学習 中では議論をせず、教師に教えられていないこと は何も答えない変な謙虚さを身につけない) たとえ話による雄弁の活用
	自然学への 数学方法	利点：自然学をよりよく解明できる 欠点：自然と接点が弱い。1箇所ですべて全滅。類推の議論を排 除	常に自然との接点で考慮	
	解析の利用	利点：複雑な問題も機械的に計算できる 欠点：記号のみでの推論で知識が上滑りする	幾何学の創造力を活用していた 図による思考を活用していた	論理の勉強はまず幾何学から入り、図による思考 と創造力を鍛えるべき
	医事	利点：化学の利用、病因の理解 欠点：徴候に注意を払わない、判断を保留し本性を待つ	徴候を観察し、対応を考える 将来起こりそうな病気に対応した予防	唯一の原因にこだわらず、徴候にも注意を払う 予防法を治療と同様に重視しよう
	道德・政治及 び雄弁	この分野は、軽視(無視)されている。品位ある指導者を生 み出す学問がない。人間の本性の学問がない。	人間に対する实用知(賢慮)を重視 論理・自然学・倫理が雄弁に上手く適合	知識・知恵の利点をよく知り、皆に理解させるよ うにする。たとえ話に有効な類推能力を磨く。
	詩作	論理は子供の想像力を殺す。しかし想像力が確立した後は、	演繹的な推論は虚構を作るのに役立つ。詩の立場での真理追究は良い。科学は類推の材料を供給。	
	神学	キリスト教の教義、神からの展開は、古代より優れている。	ヴィーゴは学問においても、神の教えから始まる統一的な展開を理想としている。	
補 助 手 段	賢慮に関す る技法集	利点：多数の技法集が存在している。 欠点：技法は多いほど効果が少ない。 しかも多数あればマニュアル依存人間を生む	個人の哲学者の指導 哲学や最善の本性を求めていた。	技法集は、方向を示すだけにとどめる。
	法賢慮	利点：法学と弁論の融合、平衡は弁論でなく法が扱う、私法 から始めるので入りやすい 欠点：法の哲学根拠が弱い、法がすぐ変わり神聖さが損な われる、全てを記述する法律は存在しないので細かな 法が多すぎる、公法・私法・神聖法が分離して統一が ない	法学は哲学者に、弁論は弁論家に分離 王の法を優先する、まず国家を考えその後で私法 を考え、政治的平衡を優先させる	法の根源を理解させる。ローマ法の成立に関して 何故かを探す。 裁判官は国家理論に基づいて裁く。国家理論と法 賢慮が融合するようにする
	芸術の手本	利点：誰でも出来る、 欠点：天才の創造を殺す	個性に応じて独創性を発揮した	並の人間は、真似をさせ、天才には手本を見せない
	印刷	利点：簡単に本が手に入る 欠点：玉石混交の本が溢れる。手書きの理解力がない。	手書き筆写で貴重な本しか写さない 筆写していく時に色々思考する	時代の評価を受けた古典を勉強する
	大学	利点：多様化、複雑化した知識を吸収できる 欠点：統一思想なしのばらばら教育	肉体の大学を作ったが、知識は個々の哲学者から 習った。哲学者は、振る舞い～表現と首尾一貫し ている。	学科間の一貫性の統一を教授たちが考える いたるところ教説の一致を維持している体系にす る。
	目的	利点：真理を追究 欠点：真らしきものを排除する	真らしいものやトピカも重視	共通感覚を磨き真らしいものも落とさない
まとめ	このような全般的な判断は、…夢中になったりせず、みなほどほどに研究した人でなければ、誰も正しく公言することができないような種類のものである。一つの学問に全精神を傾注し、全生命を費やす人が、その学問が他のあらゆるものより優っており、いかなる点においても最良であるとみなし、他のどんなことにも応用するのをわれわれは見かけるが、そういう事態になるのは、おそらく、われわれ自身およびわれわれの手にしているものごとから好ましいものを作り上げようとする、われわれの本性の弱さによってなのである。(P150～P151 から引用)			

3. 現在にも通じる事項

ヴィーコの提起した問題は、現在にも通用するものが多い。以下に主要項目を示す。

表 2 現在に通じる項目

項目	現 状	解決案
真らしいことの排除	<ul style="list-style-type: none"> 一部コンピュータ業務従事者などの、正しい仕様がないと何もしない症候群など 学会などの未証明事項の排除 例えば、『地震の予知に電波伝搬の乱れを利用する』などのアイデアは、現在の科学では説明されていないという理由で、学会では相手されていない。民間療法に関する排除にも同様な状況がある。中国の針麻酔や民間伝承による地震予知の活用とは大きく異なっている。	今までの日本の物作りは職人の経験重視と言う形で証明できないものを受け入れていた 現実に対し謙虚に対応しながら
知識の原点を考えない	何故これが成立しているのかの議論が少ない 理系では特に物理学を信じ原点に戻っての反省が少ない	トヨタ流の何故の追求 科学哲学の教育、最前線の未確定理論の教育
記号処理の上滑り	機械的な計算の結果を妄信した挙句のトラブル多数 CAD 等の計算機サポートで自動的に出来た結果だけでの設計の弊害	設計者の責任教育 トラブル時の徹底的原因追及
雄弁の排除	説明能力・プレゼンテーション能力がまだまだ不足 類推での説明が上手く出来ていない(曖昧な論述として類推排除) 実用知の教育軽視	総合学習、プレゼンテーション重視、対人スキルの教育など
道徳教育	道徳の教育のあるべき姿が不明確、哲学的な論議が不十分 小学校の国語教育へ道徳教育の変な侵入、偉人伝の読解時の正解の押し付け	哲学的な議論の裏づけのある道徳論議
総合性と統一性の不足	全体目的を無視 専門化が進みすぎ、自分の専門でないと逃げ、専門家への責任押し付けが発生 検討漏れが出来た時に対応が出来なくなる 大学教育でも学問間の統一性が取れない場合が多い、政治では専門官僚の権力増 専門家による揚げ足取りが横行する(例：立花隆と東大生の議論)	総合能力の再評価 ホームドクターやファシリティマネージャーのような専門家の育成と重視 総合担当者を助ける専門家の位置付け明確化
マニュアルの氾濫	賢慮以外にも技法集が氾濫 学校教育でも赤本が存在し依存する教師も多い	マニュアルのあるべき姿は、方向性を示すと言う ヴィーコの指針に従う
芸術の手本の存在	学校の画一的な芸術教育は、天才の創造性を殺す 多様な音楽などのマスコミ上、ネット上での氾濫	一般人に絵や歌の楽しさを教える教育の価値も認めるが、適切な個性の生かし方を考える
情報の氾濫	コンピュータ支援の出版容易化、WEB 上の情報発信で更に悪化、玉石混交の情報氾濫	情報評価のため自己責任での対応が必要 良いものを見る力をつける必要あり 古典重視と聴講生(注)の発想は一つの答え

注)ギリシャ時代の哲学新参の学習者は、ただ聞くだけの“聴講生”であり、実力と常識が身についたことを師が認めれば、発言の許される“学問生”となった。

以上